

序

チーム医療は、昨今の診療現場では欠かせないものとなり、薬剤師にも多職種チームの一員として職能の発揮が要望されるようになりました。

たとえば、病院薬剤師の病棟活動では、相互作用のある薬剤や不要・不適切と思われる薬剤の変更や中止を医師とディスカッションすることが求められます。さらに、処方箋用紙に検査値を表示する取り組みが全国的に広まりつつあり、薬局薬剤師には副作用がでていないかをモニターしてアラートを出す役割も求められるでしょう。

薬剤師が、薬剤の効果や副作用の判断、薬剤変更や減薬・用量調整の提案等を適切に行うためには、薬剤師も患者さんの検査値を読み解き、患者さんの病態を推論しなければなりません。つまり、検査は医師だけが扱うものではなく、薬剤師も基本的な検査を理解しておく必要があります。

このような薬剤師への期待に応えるために、本書では、代表的な検査について、症例（症状、検査値、処方内容）を提示し、これらの情報から患者さんの病態を推論し、なぜそのような検査値の異常を示すのかを解説し、副作用や薬剤の効果を判断し、処方提案につなげていく考え方が理解できるように構成しました。さらにステップアップのトピックスとして、チーム医療やコミュニケーションについても、医師にうまく伝わる上手なコンサルトや処方提案の仕方、ポリファーマシーの問題をとりあげました。

薬剤師全般を対象にしましたが、臨床の現場ですぐに活かせる実践的な内容は研修医にも役立つ内容になったと自負します。

本書が、検査の読み方、考え方を理解する助けとなれば幸いです。

2016年6月

執筆者を代表して
野口善令